

「はいはい、どうぞおねがいたします。」と、その男も家来になりました。この男は火の目小ぞうという名まえでした。王子はこんなめずらしい男を三人まで家来にかかえたので、大得意になって、どんどん歩いて行きました。そのかわりこれまでとちがって、三人を養うのに、たいそうなお金がかかりました。だって火の目小ぞうとナガナガの二人は、ただあたりまえの人が食べるだけしか食べませんでした。もう一人のブクブクはおなかがいくらでも広がるので

食べるものは一どに牛肉の千グラムやパンの千本ぐらいは、どこへ入ったかわからないくらいです。そんな男に、はらいっぱい食べさすには、とてもひととおりのお金ではすみません。しかし王子は、ちっともいやな顔をしないで、食べたいだけ食べさせて、どんどんお金をはらいました。そのうちにやっと例の王女のいる町へ着きました。王子はその時はじめて、自分がはるばるここまで出て来たわけを三人に話して聞かせました。そしてどうか三ばんともねないで